

お薬のしおり

肺炎と予防接種 No.139 (H25.9)

東京医科大学病院 薬剤部

暑い夏も過ぎ、過ごしやすい陽気になってきました。みなさんは肺炎という病気を耳にしたことはありますか？肺炎というと、風邪をこじらせて重くなった病気、冬にかかりやすい病気などのイメージが強いと思います。しかし、肺炎は体の中に細菌やウイルスなどが入り込んで起こる肺の炎症です。日本人の死因第3位に挙げられており、肺炎が原因で亡くなる方の95%以上が65歳以上の高齢者となっています。では、肺炎とは具体的にどのような病気なのでしょうか？

□肺炎の症状・原因

肺炎の症状としては、発熱、咳や痰、息苦しさや胸の痛みなどが挙げられます。さらに、肺炎の原因となる菌は、肺炎球菌が28%と一番多く、季節には関係なくかかる可能性がある病気です。他にもインフルエンザ菌は7.5%となっています。体の免疫力が弱まった時などに感染を起こしやすく、持病の悪化や、体調不良などをきっかけに発症する可能性のある病気です。

□高齢者の肺炎の特徴

高齢者の肺炎の場合、その症状が少なく、診断や治療が遅れがちである、他の疾患（心疾患や糖尿病など）のために重症化する可能性がある、誤嚥性肺炎が多いことなどが特徴です。高齢者肺炎では、上記の発熱などの症状はないか、あっても軽微な場合が40%程度であり、食欲不振や意識障害など一見肺炎と関係のない症状で見つかることがあります。

□肺炎の治療方法

病院を受診して肺炎が疑われた場合、その重症度が判定され、原因となる菌に対する抗生物質が選択されます。場合によっては通院ではなく、入院治療が必要となることもあります。

□肺炎の予防方法

まず、肺炎の予防のためには、毎日の習慣が重要になります。うがい、手洗い、マスクの着用、歯磨きなどで口腔内を清潔にする、食事の際の誤嚥を防ぐなどが挙げられます。また、体の免疫



力が弱まったときに発症しやすいため、規則正しい生活を心がけ、持病のある場合にはその治療に努め、免疫力を低下させないことが必要です。その他の有用な肺炎の予防方法としては、ワクチン接種が挙げられます。現在、肺炎球菌による感染症を予防するワクチンとしては、2歳以上で肺炎球菌による感染のリスクが高い人および高齢者を対象とした23価肺炎球菌多糖体ワクチン「ニューモバックス NP」と、生後2ヶ月以上9歳以下を対象とした7価肺炎球菌結合型ワクチン「プレバナー水性懸濁皮下注」の2種類があります。

□肺炎球菌ワクチンの特徴

肺炎球菌ワクチンは、肺炎球菌による肺炎などの感染症を予防し、重症化を防ぐ役割があります。成人の場合、65歳以上の方、養護老人ホームや長期療養施設を利用している方、慢性の持病をお持ちの方（COPDなどの呼吸器疾患、糖尿病など）は肺炎球菌ワクチンの接種が推奨されます。初めて接種する場合は、1年を通してどの時期でも良いとされています。また、個人の健康状態によって異なりますが、肺炎球菌ワクチンの免疫（抗体）は、5年以上持続するといわれています。2009年に厚生労働省が再接種を認可し、それからは2回目以降の接種が可能となっています。但し、5年以内に再接種を行うと、注射部位の痛みなどが強く出る恐れがありますので、1回目の接種から、5年以上の間隔を開けてください。再接種の際には医師と相談をしてください。

□肺炎球菌ワクチンとインフルエンザワクチンの同時接種

肺炎を予防するために、肺炎球菌ワクチンだけでなく、インフルエンザワクチンの接種も推奨されています。医師の判断により、肺炎球菌ワクチンとインフルエンザワクチンを同時に接種することもあります。通常は、6日間以上開けて接種します。その際、どちらのワクチンから接種するか、特に決まりはありません。インフルエンザワクチンは毎年、秋口から接種が始まりますが、肺炎球菌ワクチンは季節を問わずに接種することが可能のため、接種を希望する場合は医師へご相談ください。

これからの季節はインフルエンザの流行時期を迎え、風邪やインフルエンザなどの感染症にかかる人が増加することが予想されます。肺炎は、予防をすることで重症化を防ぐことにもつながるため、正しい知識を持ち、予防接種を行うようにしましょう。何かご不明な点などがありましたら、医師または薬剤師までご相談ください。

